airiti Library

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

歷史小説としての張文環『地に這うもの』—二つの歷史的事件に遭った台湾人の表象—

從歷史小說觀點閱讀張文環《滚地郎》一書中，反映出遭逢兩大歷史事件的台灣人表徵

doi:10.6205/jpllat.24.200812.05

台灣日本語文學報, (24), 2008

作者/Author： 曾秋桂(Chiu-Kuei Tseng)

頁數/Page： 59-83

出版日期/Publication Date：2008/12

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

http://dx.doi.org/10.6205/jpllat.24.200812.05

DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，
是這篇文章在網路上的唯一識別碼，
用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 http://doi.airiti.com

For more information,

Please see: http://doi.airiti.com

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE

最完整的學術整合查詢平台—華藝線上圖書館 ● http://www.airitilibrary.com ● Find more academic articles on Airiti Library

airiti

從歷史小說觀點閱讀張文環《滾地郎》一書中，反映出遭逢兩大歷史事件的台灣人表徵

曾秋桂
淡江大學日本語文學系教授

摘要

目前在台灣的後殖民地研究，發展蓬勃。不僅學術論文陸續爭相發表而已，以殖民地為背景書寫而發表的歷史小說更是無以計數。張文環《滾地郎》亦為其一。然而雖獲得不錯的評價卻乏相關研究。鑑此，本論文以歷史小說的觀點來閱讀《滾地郎》，首先以作品中人物像以及時代輪廓來掌握作品的結構。繼之從捕捉到的日本殖民地時期的台灣民眾的生活態度，來探析其表徵。

研究結果顯示《滾地郎》中的表徵，與兩大歷史事件相關。一為將日本殖民地帝國主義統治下生活的小說主角啓敏、秀英夫婦的辛苦奮鬥，化為烏有第二次世界大戰。二為張文環執意開始寫作《滾地郎》時，面臨到台灣與日本斷交。由於此歷史事件，直接影響到台日交流的萎縮，同時台灣在國際舞台上日漸銷聲匿跡。目睹此真實的兩大歷史事件的張文環，透過當時的台灣社會以及風土民情的描寫，勾勒出「超越異民族的友誼」。希望藉此保留下不因中日斷交而消滅的日據時代台灣風貌，而薪火相傳給日本讀者與新時代的的人們。在歷史的無情洪流中，小如粟粒的人類只能在自己能力所及，秉持著「活在當下」的信念，勇敢面對生命的這件事實。

張文環將兩個歷史事件縱橫勾勒於歷史小說《滾地郎》裡，藉著閱讀，透漏出雖然人們枉費努力徒勞無功地相繼仆倒於無情歷史之前卻仍勇敢地存活下去的事實。其勇氣正透過閱讀《滾地郎》文本，而廣留後世。

關鍵字：張文環　《滾地郎》　歷史小說　台灣　作品結構

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

Zhang Wen-Huan's "Chini haumono" as a historical novel: Representation of Taiwanese who encountered two historical events

Tseng, Chiu-Kuei
Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

Now a day, in Taiwan, the Taiwan colonial-days literary researches are booms under the influence of post colonialism. In it, Zhang Wen-Huan's "Chini haumono" had being seldom discussed by the point of work study. At first, this paper mainly observes the character of people and time image which are drawn on the work as a historical novel. Moreover, this paper catches the structure of the work and studies the representation of the people of Taiwan in Japanese colonial days.

As a result, this paper can understand that two big historical events are concerned with the work in this research. One of the incidents is World War II. Another incident is rupture with Japan and Taiwan by the advance into the international scene of the China continent. Zhang Wen-Huan has gazed at these two historical incidents. And he has drawn the friendship which exceeded the different races in the work. And he has left new age's people the memories of the Japanese colonial days. Moreover, he has asserted raw the human being in the inside of a coldhearted motion of history. In the work, he receives a structure of no eternal history and is speaking to people in the courage which continues to be live.

Keywords: Zhang Wen-huan's, "Chini haumono", Historical novel, Taiwan, Structure

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

歴史小説としての張文環『地に這うもの』
―二つの歴史的事件に遭った台湾人の表象―

曾秋桂
淡江大学日本語学科教授

要旨

現在、台湾ではポストコロニアリズムの潮流の中で日本植民地時代文学研究がブームとなり、研究論文の発表とともにその時代を扱った歴史小説も多数書かれている。その中で、張文環『地に這うもの』は、高い評価にも関わらず作品論で論じられることが少なかった。本稿はこれを歴史小説として扱い、まず作品に描かれた人間像と時代像に主に注目して作品の構造を捉え、日本植民地時代の台湾の庶民の姿を追いながら、その表象を究明しようとした。

その結果、『地に這うもの』の表象には、二つの歴史的事件の関与があることが分かった。一つは台湾を統治していた日本帝国と小説の主人公・啓敏秀英夫婦の苦闘を無に還らせた第二次世界大戦である。もう一つは、張文環に『地に這うもの』の執筆を決断させたと思われる中国大陸の国際舞台への進出と台湾の国際的孤立であり、その一環としての日本と台湾との断交である。張文環はこの二つの歴史事件を見つめ、当時の台湾の社会構造と風俗の記述を通して「異民族を超えた友情」を描き、日本と台湾との断交ですべてが消去されかねない日本統治時代の台湾を日本人の読者も含め新時代の人々に残そうとした。そして、歴史の非情な動きの中で人間ができることは自分の場に立って「いま・ここ」を生きることであるという、時間と世界と人間の構造としての歴史を見つめる主張を行っている。張文環は、作品を通して歴史の非情の前に徒労に倒れながらも生き続ける勇気を二つの歴史的事件をとおして人々に語りかけている。

キーワード　張文環　『地に這うもの』　歴史小説　台湾　構造

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

歴史小説としての張文環『地に這うもの』
―二つの歴史的事件に遭った台湾人の表象―

曾秋桂
淡江大学日本語学科教授

1．はじめに

現在、台湾では、ポストコロニアリズムの流行に乗って、台湾植民地時代文学の研究がブームとなっている。研究論文の発表は勿論前例に見ぬ盛況を見せている。それのみならず、「霧社事件」[1]、「228事件」[2]のような歴史上の大事件を材料に使った小説も数多くある。

そうした作品の一つとして戦後 31 年間の創作の空白を隔てて、小説創作を再開して出版した張文環『地に這うもの』(1975)は注目される。『地に這うもの』(以下、『地』と略す)には、歴史上の大事件を暗示しながら、日本植民地時代という時間を軸に張文環の出身地、梅仔坑庄という空間を生きていた庶民生活の風貌、人間模様がいきいきと描かれている。作品中の至るところに年代や登場人物の年齢が具体的に示されているだけでなく、例えば、『地』の第一章では、「昭和十三年、総督府の発表によると、台湾人の家庭は、納税額による資格で、日本人名に改姓名することができた。保正の実子の陳訓導は、あわよくば将来校長になれるかもしれない、それで卒先、庄役場を通じて改姓名を申請した。この梅仔坑庄では最初に許可さ

台湾日本語文学報24
台湾日本語文学会
2008年12月

[1] 日本統治期の 1930 年に起きた台湾原住民の武力蜂起の事件をいう。この事件をめぐって書いた小説作品は、近年では林蘂(1992)『瀛洲斬鯨録―台湾同胞武装抗日的歴史故事―』稲田出版有限公司、陳玉慧(2004)『海神家族』INK 印刻出版公司、閻延文(2006)『青史青山』問津堂書局、津島祐子『あまりに野蛮な』(『群像』講談社連載 2006.9-2008.5) 、姚嘉文(2006)『霧社人止関』草根出版事業有限公司がある。

[2] 1945 年の終戦後、台湾は中国大陸の所有となった。1947 年に国民党軍が台湾にやってきた際に、台湾民衆との間に起こった紛争が原因で、台湾人知識人が多数虐殺された事件をいう。この事件をめぐって書いた小説は、近年では李昂(2000)『自伝の小説』皇冠文化出版有限公司、姚嘉文(2006)『霧社人止関』草根出版事業有限公司、邱家洪(2006)『台湾大風雲第三冊二二八驚魂』前衛出版社がある。

airiti

れた台湾人の改姓名者である」（以下、下線部分論者による。）とあるように、「改姓名」の歴史的事実を、明確な「昭和十三年」の時間、並びに「梅仔坑庄」の実在した空間によって再現しようとしたことから、この小説が歴史小説の要素を持っていると見ることが出来る。本稿では評価の高い作品[3]でありながら作品論で論じられることが少ない張文環の最後の完成作とも言える『地』を歴史小説として扱い、日本植民地時代を生きた人間の姿を逐いながら、『地』にある二つの歴史事件にあった台湾人の表象を究明する。なお、本稿では、歴史的史料から張文環の創作手法を論評する方法ではなく、作品に描かれた人間像と時代像に主に注目して捉える。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

2.『地』の構成と特徴と使命

六章によって構成され長篇小説『地』は第三人称で語った小説である。台湾ではすでに知られた作品なので、各章の話しの大筋は、ここでは述べないが、構成上、読解の鍵となる点だけを取り上げる。

（1）主人公―周縁的庶民―

『地』には多数の人物が登場し一種の群像小説となっているが、各章の繋がりを見ても分かるように、主人公は啓敏と秀英の二人と言わざるをえない。二人は、養子、養女の身分で、家庭や社会の中心から逸れた、地位も学識もない周縁的な人物である。作品中では「女中と下男が似合いの夫婦になる」（P210）と説明されている。庶民社会の中でも、さらに社会的下層階級に属している周縁的な人物をあえて主人公としたのは、知識人を中心とした物語（『落蕾』の義山、『父の要求』の陳有義、『山茶花』の賢、『地の匂ひ』の清輝）のほかにも、台湾の風土とそれを支える周縁的庶民に一貫して熱い視線を向けた張文環の姿勢のゆえであろう。

（2）作品の特徴―矛盾する時間提示と作品世界との関係―

[3] 柳書琴著中島利郎訳（2002）「張文環『山茶花』解説―部落から都会へ、進退窮まった植民地の青年たち」中島利郎・河原功・下村作次郎監修『日本統治期台湾文学集成２台湾長篇小説集二』緑蔭書房 P384

airiti

同じ長篇群像小説である『山茶花』と『地』の二作間には創作手法の異同が見られる。1919年から1930年までを作中時間[4]とした『山茶花』には、「村の娘」(十)とタイトルが付けられたにもかかわらず、賢の父と茂昌商店の主人・劉水深との男の友情を描く内容から見れば、そのタイトルと明らかに一致していない。また、よく喧嘩する主人公の賢と娟の二人の仲直りや離別の理由は、ストーリーの進展から見ても無理矢理に繋げた感じをさせる。この点において言えば、『地』の話しの持ち出し方、書き方、日本語の駆使のほうが『山茶花』よりもより洗練されてきたことは否定できない。しかし、時間提示には問題がある。

『地』の第一章、第二章、第三章(第一グループと呼ぶ)では、陳家の養子になった啓敏の生い立ちを辿るために、陳家が改姓名した昭和13年に至るまでのことが、明治42年まで遡って述べられている。と同時に第四章、第五章(第二グループと呼ぶ)では、王家の養女になった秀英の生い立ちを辿るために、王家に過去にあった種々の出来事が書かれている。そして、啓敏と秀英が結ばれて、養父母から独立し新しい家庭を作ることに決めた第六章に至って、今まで二つに分かれて進んできた話し(第一グループと第二グループ)がはっきりと昭和13年の時点に合流し、昭和19年までの話しへと進展を見せるわけである。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

ところが、作品を細かく見ると、同じ事柄についての記述が違う時間で記されているところが目立つ。例えば、啓敏が魔がさして秀英に手を出したことを昭和13年の時点で述べている部分には、「二年前の夏」(P10)、「去年の夏」(P125)という時間が異なる二通りの記述がある。また、梅仔坑庄に自動車会社が出来た時点を「大正十三年」(P127、P177)、「大正十二年」(P189)の二通り、啓敏が国民中学校を中退した時点を「大正十年」(P110)、「大正十三年」(P279)

[4] 柳書琴著中島利郎訳「張文環『山茶花』解説—部落から都会へ、進退窮まった植民地の青年たち」(2002)中島利郎・河原功」下村作次郎監修『日本統治期台湾文学集成2』緑蔭書房P369

airiti

の二通りで書くといった時間的に食い違った記述が目立つ。

それだけではなく、継続中の同じ出来事を長い段落を隔てて、また逆戻りして触れていることも多い。例えば、秀英が仁徳に犯されて妊娠した話しを「第四章の一」(P131)で言って置きながら、その続きはかなり後の「第五章の三」(P178」でやっと再び出てくる。また阿蘭が山に来なくなったのを啓敏が寂しく思ったことを「第一章の二」(P15)で触れたのち、「第三章の三」(P123)、「第五章の四」(P197)に飛んで繋げているように、読者に混乱を引き起こさせる話しの展開が見られる。こういった書き方は、確かに、現在の出来事と過去の出来事を錯綜させて話しのボリュームを増やしストーリーの重層性を増す利点がある一方、時間的に食い違いが出たり話しの筋が飛躍したりするため、作品の理解を難しくしている。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008.12.31

同じ事柄に対して、作品の記述と、作中人物が言った内容が合わないこともある。例えば、秀英が啓敏の山小屋に入って、胸を見せて啓敏と肉体関係が出来た時点を「年があけて、第一期の田植が終わり」(P203)頃と設定している。それで自分に女が出来た喜びを感じ、秀英と結婚するように考えた啓敏は翌日(P207)も秀英を待ったが、秀英は養父の監視の目に気を付けて山小屋に姿を現さなかった。第三日目(P211)に、養父の目を盗んで、山小屋に啓敏に会いに来た。そして、その翌日(P215)に秀英が山小屋にやって来て、啓敏と抱き合った時に、養父に見つかった。秀英のズボンを手に取った養父の後について啓敏と秀英は派出所に出頭した。結局、陳家が結納金の名目で240圓を養父に渡した末、啓敏が秀英と結婚して、当日の夜に山小屋で娘阿蘭と三人で暮らすようになった。上述のように、秀英は啓敏と肉体関係が出来てから結婚するまで、わずか四日間の出来事に過ぎないが、作品中には「昭和十三年の春先」(P239)、「旧暦の四月十頃」(P232)と啓敏秀英夫婦の結婚の時期が明記されているため、秀英が啓敏と肉体関係が出来たのは、すなわち昭和13年の旧正月の後のことになるに違いない。しかし、派出所で通訳を通して聞かれた「いつからこの女を抱いていたのか」という吉田巡査の質

airiti

問に対して、「啓敏は、抱いた意味だけが頭にこたえて、拒絶されて鼻血が出るまで打たれたことを計算にいれなかったから、日時ははっきり覚えないが、去年の夏頃の山の東屋で、はじめて抱いたと言った」(P221)という答えにある「去年の夏」とは明らかに違っている。ちなみに、「拒絶されて鼻血が出るまで打たれたこと」とは、夕立に濡れられた秀英を啓敏が山小屋で犯そうとしたことであり、四回(P10、P112、P125、P200)も触れられている。啓敏の答えの「去年の夏」について、秀英はただ「頭を深くうなづいて」(P222)異論を示さなかった。愛し合った二人の肉体関係が出来た時点については、読み手が作品の描写を通して理解した「四日間前」と、主人公が告白した「去年の夏」とは、大きな時間的食い違いが『地』の文脈からは生じる。具体的な年代と場所によって構築された『地』の世界は歴史小説として見てもよいが、しかし、作品中で時間を明示、強調しながらも、時間提示を相互に矛盾させ、作品世界の曖昧さを増したことは『地』の特徴として認められよう。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

3.『地』における時間と空間

(1)作品の時間

次に、『地』における作品理解の困難点の一つある時間提示の問題について、以下の四例を取り上げて具体的に示す。

①公学校の一年生の時、陳啓敏は十六歳、武章が八歳、淑銀が七歳であった。(第一章の一 P3)

②大正八年、陳久旺の実子陳武章は九つになって、長女の淑銀が八つになった。陳啓敏は十五歳になった。(第三章の一 P104)

③陳啓敏が国民学校を中退したのは、大正十年で、十六歳になった。(第三章の二 P110)

④大正十二年、啓敏が十六歳で公学校に入学し、十三年の春に退学した。(第六章の三 P279)

例①から見ると、養子の啓敏と弟の武章とは、8 才ほど離れている。しかし、例②になると、その年齢の隔たりが 6 才に縮む。その

airiti

真偽を確かめるために、それに関係する記述を見よう。啓敏が5才の中秋の時に陳家の養子にやって来た(P65、P76、P77)。それを「啓敏が来た翌年の旧暦の六月中旬に、養母に男の子が生まれた。(中略)その赤ちゃんが陳武章である」(P83-84)と合わせて見ると、啓敏が6才の時に1才の弟が生まれたのである。生まれて来たばかりの赤ん坊がすぐ1才であるという数え年の計算仕方は、旧暦に沿って生活を送る人々の慣習の一つである。父の久旺の結婚の「明治四十二年の旧暦の十二月中旬」(P20)、啓敏親子三人が一緒に暮らした「旧暦の四月十日ごろ」(P232)からも、当時の人々が旧暦を基準に生活していることが分かった。そうだとすると、弟の武章は兄の啓敏とは、5才離れていると言った方が正確である。また、例③、例④のように、啓敏が国民学校を中退したのは、「大正十年」と「大正十三年」の二通りの時間があるが、定かではない。

こういった定かではない時間を認定する困難さを克服するために、各人物の年齢の差を計算し、主人公啓敏秀英夫婦が結婚し、人生の門出に当たる昭和13年を基準に据え、『地』の主要人物の年齢表を作成する方法を採る。基準を昭和13年にしたのは、結婚という大事な人生の門出の年のため、作品では中心的時間になっていると考えられるからである。次は各人物の年齢の差であるが、啓敏と秀英の夫になる仁徳とは、同じ年(P107.124.168.170)である。そして、第四章の一(P127)の冒頭を見て分かるように、30才の仁徳と25才の英秀とは、5才ほど離れている。前述のように、仁徳と同じ年の啓敏が弟の武章と5才違っているため、英秀は実は啓敏の弟武章と同じ年である。また、啓敏が秀英と結婚した昭和13年に、阿蘭が8才(P240.255)である。さらに「陳啓敏が三十歳になった。弟も結婚し妹も嫁にいった。いつのまにか町で流行歌が軍歌にかわった。昭和十二敏の夏ごろである」(P122)の文脈の記述に従えば、昭和12年の時に啓敏が確かに30才であった。

『地』で語られている凡てをカバーできるわけではないが、上に挙げた記述を手掛かりに、『地』の主要人物の年齢表を作成すると以

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

下のようになる。

表(一)『地に這うもの』主要人物の年齢表

年齢 年	久旺	啓敏 仁徳	武章	秀英	阿蘭	祥吉	妙子	補足
明治 41	23	1						1908 年
42	24	2						説明(1)
43	25	3						
44	26	4						説明(2)
明治 45 大正元年	27	5						1912 年
2	28	6	1	1				
3	29	7	2	2				
4	30	8	3	3				
5	31	9	4	4				
6	32	10	5	5				
7	33	11	6	6				
8	34	12	7	7				
9	35	13	8	8				
10	36	14	9	9				
11	37	15	10	10				
12	38	16	11	11				説明(3)
13	39	17	12	12				
14	40	18	13	13				
大正 15 昭和元年	41	19	14	14				1925 年
2	42	20	15	15				
3	43	21	16	16				
4	44	22	17	17				
5	45	23	18	18				

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

6	46	24	19	19	1			説明(4)
7	47	25	20	20	2			
8	48	26	21	21	3			
9	49	27	22	22	4			
10	50	28	23	23	5			
11	51	29	24	24	6			
12	**52**	**30**	**25**	**25**	**7**			
13	53	31	26	26	8			基準点
14	55	32	27	27	9	1		
15	56	33	28	28	10	2		
16	57	34	29	29	11	3		
17	58	35	30	30	12	4	1	
18	59	36	31	31	13	5	2	説明(5)
19	60	37	32	32	14	6	3	

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

出来るだけ正確に主要人物の年齢表を作ってみたが、年齢が作品に記述された年と合わない部分が5箇所あり、上表の補足に掲げた順番に説明する。

まず、説明(1)の物語開始の時間である。『地』では、久旺の結婚の「明治四十二年の旧暦の十二月中旬」(P20)より、「昭和十九年の夏」(P328、P329)に至るまでの35年間(1909－1944)の事柄が記述されている。しかし、物語の始まりに位置された「明治四十二年の旧暦の十二月中旬」が旧暦で言われているが、厳密に言えば、明治43年の春先のことになろう。何故かというと、第一章の五では、語り手が不倫している久旺の妻阿錦の心情を「結婚してから丸一年もすぎ、裏の庭の竹藪にある桃の木の花が咲きだした。去年見た新婚当時の桃の花とは感じが違っていた」(P34-35)と代弁しているからである。通常に言えば、旧暦は新暦より凡そ一ヶ月か二ヶ月ほど遅れる。明治42年新暦の10月10日、すなわち、旧暦8月28日[5]に生ま

[5] 柳書琴編(2002)「張文環生平写作年表」『張文環全集第8巻文献集』P120台中

airiti

れた張文環の誕生日を見れば、明治 42 年の場合にも、新暦と旧暦とは大体一ヶ月半ぐらいの隔たりがある。「明治四十二年の旧暦の十二月中旬」だとすると、大体明治 43 年の 1 月から 2 月にかけて桃花が咲く春先の頃であろう。したがって、もっと正確に言えば、『地』の時間設定は、1908 年から 1944 年までの 36 年間のことである。

次の説明(2)の啓敏の年齢のことである。第一章の内容を大まかに整理すると、以下のようである。久旺が結婚した明治 43 年の「丸一年もすぎ」た明治 44 年の 5 月の端午節句の二週間前に、久旺が不倫したため、父が怒って急死した。亡くなった百日後、啓敏を養子に貰う話が出て、中秋に 5 才の啓敏が陳家に連れて来られた。従って、明治 44 年に啓敏が 5 才のはずである。しかし、これは表(一)に示してある年齢とは合わない。

説明(3)に関しては、先ほど見てきた啓敏の 16 才は、正しくは大正 12 年のはずである。

説明(4)の阿蘭を生んだ時の秀英の年齢である。前述したように、秀英が 16 才に一回、17 才に二回、仁徳にレイプされた。「翌年の清明節近く」(P179)に 18 才の秀英が阿蘭を生んで、親子が 17 才違っている。これは、表(一)に示してある 19 才の年齢とは合わない。

最後の説明(5)の阿蘭が結婚した年齢である。昭和 18 年に結婚した阿蘭のことを「十五歳で結婚しなければならないのも、田舎の戦時花嫁」(第六章の五 P321)とした記述がある。これは、表(一)に示してある 13 才の年齢とは合わない。

一つの目安として作中の主要人物の年齢を照合するのに役立つと思われる。前述したように、時間を明示、強調しながらも、時間提示を相互に矛盾させ、作品世界の曖昧さを増したことが『地』の特徴として見られる。

表(一)から見ると、1908 年生まれの啓敏は 1909 年生まれの張文環と年齢的にあまり違わないことが分かった。このことから言えば

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

県立文化中心

airiti

作者張文環を啓敏に重ねて見ることも可能であろう。言い換えれば、『地』は「梅仔坑庄」を故郷に持つ作者張文環が同年輩の啓敏という、在り得べき別な境遇の人物を通して、体験し見聞した歴史を書いた小説だとも言えるのである。

（２）作品の空間

作品の出来事は、すべて「梅仔坑庄」という空間（これを「内側」と呼ぶ）に限って起こっている。作品中には、久旺の妻呉錦の実家の「竹崎庄」[6]、武章の通った学校の「台南師範学校」、淑銀が通った学校の「台南長老教女学校」、そして仁徳の勤め先「嘉義市」、明通の師匠陳万生が住んでいる「大林街」、阿媛の来客が「山」から来たと、それ以外の場所も触れられている。志願兵の曾得志の行方は最後まで書かれていないが、こうした「外側」へ勉学や仕事や戦争などのために「梅仔坑庄」から出ても、阿蘭の主人貴樹以外は皆生きて戻ってきた。いわば、殆どの人々は「梅仔坑庄」を生活基盤にし、そこに根付いて生活している。そして、結婚の目的以外に、余所から「梅仔坑庄」に来て定着し生活する人は一人もいなかった。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

作品中には、「内側」の「梅仔坑庄」と「外側」との間を行ったり来たりする、言わば越境する人がいる。秀英の夫になるはずの仁徳と、久旺の不倫相手の芸者・阿琴とその母、明通の師匠、吉田巡査夫婦、中山巡査夫婦である。芸者・阿琴は久旺の父が息子・久旺の不倫を知って死んだという情報を知り、母と夜逃げして「梅仔坑庄」から離れた。明通の師匠は明通が怪我したことを知り、見舞いに来た後、家の「大林埔」に戻った。転勤のために吉田夫婦は中山夫婦と入れ替わって「梅仔坑庄」に入ってきたが、いずれ同じ転勤のために「梅仔坑庄」を後にするに違いない。このように、「梅仔坑庄」に越境してきた外部の人は結局帰るべきところに帰る人なのである。

---

[6] 第一章の三 P18 では、「竹崎庄は梅仔坑庄から十キロほど離れていて、阿里山鉄道駅のある所である」とある。

airiti

ただ仁徳の場合は特異に見える。嘉義の自動会社に勤め、妻を迎え、子供を生ませた仁徳は一度時々仕事の関係で「梅仔坑庄」に戻ったが、秀英を犯した後は一時的に帰らなくなった。最後に、戦争のために家族を連れて故郷に疎開してきたが、自分は嘉義に止まり、越境を続けていた。秀英の夫になるはずの仁徳が一時的に故郷の「梅仔坑庄」を捨てることを設定しないと、啓敏と秀英との結婚は不可能である。それを考えると、仁徳の越境は、啓敏と秀英との結婚を促す上で大きな意味のあることである。要するに、「梅仔坑庄」の人間は「内側」から一度「外側」へ出たが、命のある限り、「梅仔坑庄」の「内側」へ再び戻ってくるという構図を取っている。このように、作品空間を「梅仔坑庄」に限定した意図がはっきり分かる。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

4.『地』に見られる重層的社会階層構造

(1)台湾社会内部の権力的構図

『地』は、日本統治下の台湾の中部より南にある「梅仔坑庄」を背景とした作品であるため、当然、日本人が造る植民地社会支配秩序があり、日本人はその中で上級管理階層に位置づけられる。作品を見た限り、この山村では、日本人は警部補、巡査、公学校の校長、訓導、農林関係の仕事の担当、庄長、経済警察、警務局の課長の職務についている。

中級管理階層からは、台湾人が支配層となり「夫婦相和し、模範家庭」(P99)を基準に台湾人から選ばれた保正がある。この山村の規模によって、西保正と東保正の二人が設けられている。さらに、その下に下級管理階層として「街で一番高い給料を払う庄役場」(第六章の四 P299)に勤める人のほか、派出所の通訳、役場の給事、書記補を仕事にした阿蘭の夫貴樹のような人がある。

さらに、植民地支配を受ける台湾社会の内部自体に目を向けると、そこには養子(女)制度を通して見た内的な支配者と被支配者の構図がはっきりと浮かび上がってくる。

山村では、久旺は「明治時代から三軒あったうちの一軒の老舗」

airiti

(P17)の金源成商店という店を持ち、「金満家」(P63)と言われ、15人のうち、少なくとも7名の労働者[7]を抱えており、水田を小作人に貸し出す(P114)地主である。「梅仔坑庄内での多額納税者」(P272)として、「最初に許可された台湾人の改姓名者」(P3)であり、「町で一番羽振りのいい保正になった」(P198)。「改姓名者、植民地人の最高階級になる」という時代では、陳家は高級管理階層の日本人に次ぎ、山村で幅を利かせる台湾人社会内での上流階級だと言えよう。

秀英の娘阿蘭が嫁いだ日新商店は、「街で唯一の水車による精米所を持っている」(P291)「健実な店」(P292)である。店主の名は林大目で、妻は、「街でも有名な良妻賢母で、教育をうけていないが、人づきあいがよく、やさしい婦人」(P291)で、家に遊びに行った阿蘭の弟に「百二十元」(P323)を包んで上げたことから見れば、決して吝嗇な人ではない。五人家族以外に養女がいるとは書かれていないため、山村では中流階級に属していると推測出来よう。

秀英を養女としてもらった王家は、「台湾の田舎の中産階級以下の家はよく養女をもらって、大きくなったら息子の嫁にあてがう習慣がある。貧乏な家庭は気心のあう嫁をもらうのは、この方法が一番都合がいい」(P133)という記述から言えば、台湾社会では下層中産階級の家であった。

台湾日本語文學報24
台湾日本語文學會
2008年12月

啓敏は上流階級の陳家の養子とはいえ、実子が生まれてから、飯炊きの阿春婆の指し図を受けて生活しなければならないようになった。それは下層中産階級家庭の養女・秀英が受けた仕打ちと、あまり変わりはない。要するに、啓敏と秀英は、養子という身分で、間違いなく台湾社会の下層階級の中で生きているのである。

(2)養子、養女制度に苛まれた啓敏と秀英

台湾社会の下層階級として生きている養子・啓敏が洩らした「どうせ、世話してくれる者があるわけではないし、食べるものもろく

[7] この人数は、「店員と合わせて一家十五人もいる家庭」(第一章の二 P11)と、「店員は番頭と阿春婆さんを合わせて七人」(第六章の一 P248)の記述による。

airiti

に与えられないで、こき使われるのがせきのやまだ」(P11)と「自分のような人間は一つもらわずに、蹴とばされて生まれてきたにちがいない」(P116)という感慨を見ると、啓敏が陳家で受けた仕打ちは結構ひどいものだったと言える。

この啓敏が結婚するまでの経歴を簡単に振り返ってみる。陳家に養子に貰われて来た当時、敏啓は、「自分の生家人たちは、自分が要らないので、養子に出したのだ」(P80)と思って、心的トラウマが出来た。その傷がようやく親切に身のまわりの世話をしてくれた養母のために、「子供は実母の記憶を養母の新しい感覚の中に眠りにおちた」(P77)とあるように、癒された。しかし、弟の武章が生まれ、養母の愛情が実子に移ることを嫉妬し、弟を殺そうとした事件(P84)を引き起こした結果、啓敏は家中の危険人物となり、その後は部屋を下女部屋に変えられてしまった。かつて啓敏には美しくて「観音様」(P86)のように見えた養母からも遠ざけられ、再び心的トラウマを深めて行った。そして、陳家では飯たきの阿春婆にまでこき使われる下男に過ぎない存在となったのである。ここでユングの精神分析学的に解釈すれば、啓敏は「母なるもの」を求め続ける、マザーコンプレックスが心の底に潜んでおり、秀英と関係が出来た後、「私にも女が出来たのだ。私を愛してる女が出来たのだ」(P204)と叫んだ喜びによって、心的トラウマから解放された。と同時に「啓敏や秀英の半生は人間を信用することが出来ず、孤独に慣れて来た」(P245)が、養母に求めた「母なるもの」を「観音様の使いのような気がしてならない」(P233) 妻の秀英が満足させてくれたのである。

一方、啓敏と結ばれるまでの秀英の経歴も見よう。秀英は「満一つのとき」(P127) 養女として下層中産階級の王家に来た。「兄の王仁のいない所、そっとその教科書に描いてる絵を見るが好きだった」(P168)養女の秀英は兄に怒られたことがある。女子教育をあまり重視していない王家では、「女中以下の娘」(P128)扱いにされた秀英は、

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

16 才の年の暮れ[8]に夫になるはずだが、他人と結婚してしまった阿徳に操を奪われた。それに続いて、翌年端午の節句の時に、17 才の秀英は二回目に無理矢理に阿徳に犯された(P170-171)。三回目は、その一ヶ月後のお盆であった(P174)。既婚者の阿徳に好きなようにされたことを知りながら、知らん振りをする養父母のことを見て、「自分は親子三人から、はみだされてるものに思われてならなかった」(P176)と、余計者のように感じた秀英は、その秋、妊娠したことが分かり、翌年の清明節に私生児の阿蘭を生んだのである。操を奪われた後、自殺を考えたが、「雌牛のように自分の宿命にしたがうほかない鈍重な女になった」(P178)。その後、啓敏との肉体関係を養父・明通に摘発され、派出所まで連れ出された時、「お父さんと呼びつづけてきた二十数年、それでなくても同じ釜の飯を喰い、下女のように働いてきた二十数年間。それをもかえりみず、利得のために、自分を衆人の前で裸にする養父の下心が憎らしく」(P219)感じた秀英は、かつて「豚くさい臭いにおいに包まれた」(P173)身体と仁徳に嫌われたが、「絹のようにすべらかな彼女の体温が彼に勇気を吹き込んだ」(P205)と受け止めた啓敏を心より愛していた。結婚後、啓敏の目には、「偉い」(P233)、「聡明な」(P262)、「物事に対する理解力が強い」(P289)妻として、「わき見もせず一心不乱に生活を守っている」(P289)。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

(3) 啓敏夫婦が出会った異民族の友情

愛し合う二人は養父の摘発で絶望のドン底にあったが、夫婦として結ばれ幸せに暮らせるようになったのは、「奇跡的にいいお巡りさん」(P234)に巡り会ったからである。この「いいお巡りさん」とは、かつて派出所で「それなら仲人を立てて談判すればいいではないか、非常手段を用いなくても」(P221)と、解決方法を示してくれた吉田取締巡査であった。この吉田巡査を啓敏夫婦は仲人と思って、「鶏」

[8] 作品中は、「十五、十六とはいえ大柄な秀英の裸身は成熟した」(第四章の一 P129)とあるが、後に出た話との繋がりを考えると、正確に言うと、16 才である。

airiti

(P250)、「初竹筍」(P277)を御礼に吉田巡査の家に届けた。この吉田巡査は、「海軍あがりの巡査だけあって、見聞がひろいせいか人道主義的な所があって、ユーモアもある」(P199)という性格にもよるが、吉田巡査が九死に一生を得る助けの手を差し伸べてくれたことは、前任の中山巡査夫人と東保正夫人との間に見られた「異民族を越えた友情」(P122)のもう一つの具現である。日本統治時代の国家レベルで定めた政策の執行においては植民地の被統治民衆の感情を深く傷つけた圧政もあったであろうが、その中で『地』に描かれた二つの「異民族を越えた友情」は印象深い。台湾社会内部でいわば被抑圧者内の被抑圧者である最下層の養子養女の陋習に喘いでいた啓敏・秀英は、統治者で最高位に位置する抑圧者であるはずの外来の日本人による「異民族を越えた友情」によってかえって助けられ、台湾人社会内部では絶対に許されなかったはずの新しい家庭を築くことが出来たのである。啓敏・秀英にとっては、異民族（日本人）＝支配者＝解放者・保護者対同民族（台湾人）＝支配者＝抑圧者・差別者という逆転した関係が生じていることになる。

台灣日本語文學會 2008年12月

（4）異民族を越えた友情―日本と断交した 1972 年から見て

主人公の啓敏・秀英を窮地に追い込んだのは、外来の日本帝国主義による台湾統治政策と言うよりも、台湾社会内部に存在した養子養女制度である。また、台湾社会内部に存在した養子養女制度に虐げられた最も危うい時に、啓敏・秀英を救ったのは抑圧者であるはずの植民地統治側の吉田巡査であった。この異民族を越えた友情という設定は、今まで二項対立的論理で盛んに論じられてきた、植民地時代の台湾社会における宗主国(支配者)と植民地(被支配者)という構図とは、かけ離れている。

見ていくと、作品中には、日本の読者を意識して書かれたと思われる台湾の慣習風俗、例えば縁談結び(P21.P296)、養女制度(P133)、養子制度(P60)、年始挨拶のタブー(P152-153.P263)なども沢山作品に描かれている。台湾特有の俗語や言葉遣い、「鴨母のあとずさり」(P12.P196)、「おっぱいはれんぶう型」(P20)、妻を「妹」に呼ぶこ

airiti

と(P28)、「気死了」(P47)、「死皇不如活乞食」(P111)なども念入りな説明が付け加えられている。「老いて子に従う」(P10)、「待てば海路の日和」(P111)、「地獄の沙汰も金次第」(P185)、「犬も歩けば棒にあたる」(P212)などの日本語の諺も多用されている。これらの手法は、日本人の読者との距離を縮めさせ、台湾を日本人に身近で親しめる土地のように感じさせるために取った文学的ストラテジーと思えてならない。

張文環は小説創作を中断して30年あまり経った1972年に『地』[9]を突然、起稿し、毎朝午前3時に起きて2時間ずつ日本語で書き、二年で完成させ、1975年に日本で出版した。国民党政権のもと、台湾では日本語に代わって中国語を共通語にする言語政策が進んでいたにも関わらず、1972年に敢て日本語を使用言語とし、日本を発表場所にしたことからも、日本あるいは日本人を主な相手に『地』が発表されたと見られる創作動機が窺われる。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

1972年と言えば、日中共同声明が調印され、日本と中国大陸の外交関係が樹立された年である。調印されると同時に日本の外務省は台湾との外交関係断絶を宣言した[10]。台湾の国際的関係は、このとき確かに一大打撃を受けたに違いない。まして、青春時代を日本で過ごし、日本人の女性を妻にし、日本統治期の日本語教育を受けた一台湾人である張文環にとっては、日本は精神的母国であり、日本の台湾との断交は認めがたい痛恨事とも言える見たくない現実のはずである。国際社会の権力闘争の渦に巻き込まれながらも、日本と深い関係にあり、日本語の分かる一台湾人として、張文環は避けて通れない 1972 年の断交という歴史的事実を悲しい気持ちで受け止め、『地』を書き、日本で出版することを通して、台湾の日本統治時代を庶民の目で描き、いわば逆転された権力関係の、より親しまれる土地として日本人の記憶を蘇らせようとした。『地』のテーマの一

[9] 『土』の創作経緯は、張建隆「生息於斯的「滾土郎」――張文環」張恒豪編(1994・初版 1991)『台湾作家全集・短篇小説卷／日據時代⑩張文環集』前衛出版社 P268
[10] 川崎庸一代表監修(1993・初版 1991)『読める年表・日本史』自由国民社 P1045

airiti

つは、間違いなく異民族を越えた日本人の友情であり、断交時代の日本人に知ってもらいたい、日本統治時代の台湾事情が織り込まれている。それこそ、『地』に見られる張文環の日本を見据えた眼差しの文学的ストラテジーである。

５．歴史小説『地』の示唆

（１）「土」に根付いた啓敏夫婦の生き方

前節で述べた日本統治時代の権力関係の描出と同時に、『地』には台湾人自身に告げた確かなメッセージが同時にある。かつて、ある夏昼下りに、魔がさして秀英を侮辱した後、人嫌いに陥っていた啓敏は、「人間が悩むことは明日という日があるからである。絶望的になったときは、ただ今日という日をくりかえしているだけにすぎない」(P201)と考えた。啓敏と同じように、「秀英は毎日悩むことになった。悩むことは明日ということが芽生えてきたと同じなのである」(P202)という一節がある。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

このように、無学な二人は「悩む」ことを怖がらずに、悩むからこそ明日があるという人生の苦しみを実感した生き方をしているように思われる。いろいろな辛酸を嘗めた前半生を経た二人が、新しい家庭を作ると同時に、「人間は人事を尽して天命を待つほかはない。これは啓敏一家の人生観である」(P272)ことを探しあてたわけである。そして、「跣足階級の百姓」(P288)と啓敏は観念し、「土にだけたよって、彼はわき見しないで一心不乱に働くのが人生を開拓する唯一の路だと心得ている」(P288)。そして、戦況が圧迫し統治が厳しくなっていくなかでも、「土でも呼吸していることがよくわかる。絶えずたがやかさなければ穀物は出来ない」(P295)と、土地に根付いて生きていこうとする強い意志が読み取れる。これこそ、題名の「地に這うもの」たる生き方を髣髴とさせる。

（２）母・秀英の切なる願いとその破滅

第六章に入り、山小屋での家族三人の新しい生活では秀英がよく神様に祈る場面が見られる。それを示すと、以下のようになる。

airiti

(A)山小屋に移転してきた時

①「神様!私たち三人を無事であるように護ってください。私たちは天国へ行けるなどという大それことを望んでいません。ただ無事でさえあればいいです」(第六章の一 P232)

②「神様、私たち、神様のために、何も出来ません。私たちは、悪いことをした覚えもありません。だから、ただ無事でさえあればいいのです」(第六章の一 P233)

(B)三人で迎えた初めてのお盆の時

①「神様!私たちは貧しいながらも、供え物をととのえてました。山の神様、土地公様、私の家の近辺の仏さま、来たりてうけよ。そして、私たち一家が平安と無事であるようにお護り下さい。来年はもっと供物を盛大にいたします」(第六章の一 P252)

②「石頭公様、私たちの頭も石のように堅くなるように御願いいたします」(第六章の一 P253)

(C) 三人で迎えた初めての大晦日の夜

①「神様!私たちは神様にいいこともしていないので、天国になどへ行けることは望みません。しかし私たちは悪いこともしていないから、地獄へおとされる理由もありません。神様!私たちは無事でさえあればいいんです。去年が無事であったように、今年も無事であるようにお願いいたします」 (第六章の二 P261)

②「山神、土地、衆神(中略)どうか善良な貧乏な私の家を護ってください」(第六章の二 P262)

(D)日課

「神様!私たちを憐れんで、無事であるようにお護りください」(第六章の三 P289)

(E)婿の貴樹が兵隊に取られてからの毎朝

「神様!私達は一生、悪いことをしたおぼえがありません。娘の阿蘭も子供のときから、私が苦労して・・私の夫が苦労して・・今日まで、お蔭様で結婚しましたが、・・・婿はすぐ兵隊にとられました。神様!婿林貴樹の命をたすけてやって下さい。夫と私と娘

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

airiti

を憐れんで下さい。私の夫陳啓敏に同情してください。陳啓敏は改姓名して、千田真喜男になっております。・・・惨々に苦労して・・・」（第六章の五 P326）

以上の五つの場面で誠意を込めて神様に祈った秀英の姿は印象的である。その祈りの言葉には「無事であるように」が共通項として見られる。これは、平凡な庶民の家庭でのまったく平凡な卑近な願い事の典型とも言えよう。また、秀英が祈った場面では、いずれも啓敏が「妻がズバリ自分の願いを言いあてた」(P233) と同感を示していたことを見れば、この平凡な願いこそ、苦労してきた啓敏夫婦の心に共通した真摯なものである。しかし、秀英が神様に祈ったこの切なる願いは、婿の戦死と夫の急死で破滅にいたった。幼児二人を連れて秀英は「神様!私たちは地獄へおとされる理由がない。私たちは地獄へおとされる理由がない」(P332)と念じながら、阿蘭の家に山路を急いでいるところで、物語の残酷にも見える結末を迎えたのである。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

（3）『地』が示唆するもの

啓敏と結婚後、秀英は事あるたびに、落ち込んだ啓敏を支えてきた。例えば、戦争のため物価統制がさらに一段と厳しくなった際には、「人間って、成るようにしかならない。私らの知ったことじゃないよ。ほしいものだけもって行けばいいじゃないの。まさか山や畑までもって行かれるわけはないでしょう」と(P286)秀英は啓敏に言っている。また、娘・阿蘭が嫁に行った後、「お前さんはいつまで、くよくよしないでもいいよ、・・・つらいけれど、我慢しなくてはね(中略)私たち、悪いことをしてないから神様が護ってくれます、気にしないで」(P312)と秀英は啓敏を慰めている。「人間って、成るようにしかならない」、「つらいけれど、我慢しなくてはね」の言葉の通り、秀英がまさにそれを身をもって実践して来られたからこそ、そんな達観した人生観を持つようになったのであろう。しかし、「悪いことをしてないから神様が護ってくれます、気にしないで」とは裏腹に、秀英は明らかに信じてきた神様に裏切られてしまった。か

airiti

つて秀英が夫に言った「すべて神様が決めるんだから、人間がどんなにあくせくしたところで、神様が許さなければどうにもならない」(P281)との一言は、啓敏夫婦を待つこの結末と軌に一にしている。『地』は、啓敏一家がいくら努力して泥沼から抜け出たとしても、沢山の艱難を乗り越えたとしても、結局戦争という大きな悲劇から免れることは出来ないという、その生が「徒労」に終わった歴史上の多くの人間の運命の一コマを象徴するドラマなのである。植民地時代であれ、そうでない時代であれ、どんな時代でも非情な運命が永遠に人間を待っている。それは人間の死の運命と同じことである。だからと言って死があるために人間はいつも嘆きながら生きているわけではなく、死があるこそ、逆に人間が現在をより堅実に生きていこうとすることと同様である。つまり、人間の努力や願いを越えて遥かに一時代を動かす歴史を貫く力があり、運命があるのである。逆説的に言えば、運命の前に人間の努力を無駄だと否定するのではなく、人間の力で逆らえない「運命」を冷静に受け止め、その運命が訪れるまで人間が全身全力で堅実に生きる生の喜びこそ、土地に根付いて生きていた啓敏一家が教えてくれたものだと受け止められよう。また、それは『地』のテーマとして、台湾人の我々に向けた張文環の人生観でもあろう。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

見てきたように、『地』は、日本植民地時代において、社会の周縁に置かれた人物を主人公にし、すべての努力が徒労に終わった人間ドラマである。この結末からは、たとえば同じように目立たない人物を主人公にした井上靖の歴史小説『天平の甍』(1957)が思い起こされよう。栄叡、戒融、普照、玄朗の四人の留学僧が伝戒の師僧の招聘という使命を託され、命を懸けて危ない渡海をし、中国大陸に行った。四人の中で一番使命感が強い栄叡は最後、任務を遂げずに中国で客死した。せっかく中国に来たが、伝戒の師僧の招聘だけでは詰まらなく思った戒融は見聞を広げるために途中から抜け出した。玄朗は中国人女性を妻にし、子供まで出来て中国に定着した。伝戒の師僧鑑真の渡日の大任は、皮肉にも意志が弱かった普照の手によ

airiti

って完成された。しかし、多くの犠牲を払い辛酸を嘗めた後、伝戒の師・僧鑑真を無事に日本に連れて行った時には、日本の政治状況はもはや伝戒の師僧鑑真を招聘する意味が無くなってしまった。また、生涯をかけて留学僧・業行が写し取った多大な貴重な仏教経巻は、日本渡航の時に遭難し海底に沈んでしまった。多数の人々の凡ての努力は結局徒労に終わってしまった。ここにも、張文環の『地』の結末と同じように、時代に翻弄される人間の運命的な姿が映し出されている。井上靖の名作『天平の甍』にも、張文環の『地』にも共通に見られるのは結果を顧みることなく歴史の非情に向かってあくまでも進み続ける人間の生そのものである。

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月

6．結論

張文環の『地』には、二つの大きな歴史的事件が関わっている。一つは台湾を統治していた日本帝国を破滅させ、同時に小説の主人公・啓敏秀英夫婦の苦闘の一切を無に還らせた第二次世界大戦である。もう一つは、張文環に『地に這うもの』の執筆を決断させたと思われる中国大陸の国際舞台への進出と台湾の国際的孤立であり、その一環としての日本と台湾との断交である。二つの歴史事件は、張文環自身の運命を変え、また、台湾自身の運命を変えた大きな歴史の歯車の動きである。

人生の終わりに当たって張文環は二つの歴史事件を見つめ、『地』に二つのメッセージを残した。

ひとつは、日本と台湾とが断交することによって、さらに記憶のすべてが失われるかもしれない日本統治時代の台湾を日本人の読者も含め新時代の人々に残そうとする意思である。それは当時の台湾の社会構造と風俗の記述を通して「異民族を超えた友情」の記憶として作品の中に結晶化された。

もう一つは、二つの大きな歴史事件を見つめながら、歴史の非情な動きの中で人間ができることは自分の場に立って「いま・ここ」を生きることであるという、時間と世界と人間の構造としての歴史

airiti

を見つめる主張である。人間の意思を超えた存在を神と呼ぶとすれば、人間の希望や願望とはまったく関係のない作品の結末での主人公・啓敏秀英夫婦の破滅のように歴史の非情な動きは実は「神」であり、その神の前に人間はただ自分の生を自分の今、生きる時空の中で追求することしかできない。

歴史の前には「徒労」であるとしても、「土に這うもの」としての人間の生の記録は刻まれ続ける、張文環の歴史観は、破滅後の啓敏・秀英一家の運命をも透視して、こう人々に語りかけているのである。

テキスト

張文環（1975）『地に這うもの』現代文化社

参考文献

川崎庸一代表監修（1993・初版 1991）『読める年表・日本史』自由国民社
張建隆「生息於斯的「滾土郎」—張文環」張恒豪編（1994・初版 1991）『台湾作家全集・短篇小説巻／日據時代⑩張文環集』前衛出版社
林藜（1992）『瀛洲斬鯨録—台湾同胞武装抗日的歴史故事—』稲田出版有限公司
李昂（2000）『自伝の小説』皇冠文化出版有限公司
柳書琴編（2002）「張文環生平写作年表」『張文環全集第 8 巻文献集』台中県立文化中心
陳玉慧（2004）『海神家族』INK 印刻出版公司
閻延文（2006）『青史青山』問津堂書局
邱家洪（2006）『台湾大風雲第三冊二二八驚魂』前衛出版社
姚嘉文（2006）『霧社人止関』草根出版事業有限公司
津島祐子（2006.9-2008.5）「あまりに野蛮な」『群像』講談社
柳書琴著中島利郎訳（2002）「張文環『山茶花』解説—部落から都会へ、進退窮まった植民地の青年たち」中島利郎・川原功・下村作次郎監修『日本統治期台湾文学集成 2 台湾長篇小説集二』緑蔭書房

台灣日本語文學報24
台灣日本語文學會
2008年12月